

(3)東海・東南海・南海地震の予測

平成24年8月に、内閣府から発表された中間報告によれば、これらの地震が連動して発生すると、大阪市付近は震度6強～6弱の揺れが発生し、大阪湾付近には110分後に、5mの津波が到達すると予測されている。

この内容を受けて、大阪市危機管理室から、大阪市域の津波浸水想定区域(暫定)が公表された。



2-5.地区特性のまとめと防災課題

(1)避難場所の安全性(水害)

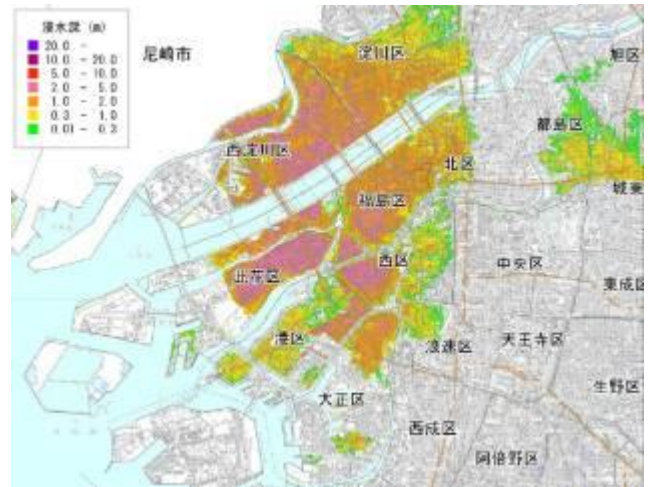
淀川の外水氾濫時には本地域一帯は深い浸水に見舞われることが予測されている。本地域の収容避難所は、大隅西小学校、瑞光中学校、大阪経済大学であり、校舎の2階まで浸水する見込みである。

一方で、本地域には低層住宅が多くみられ、洪水時に避難に遅れた人や低層住宅の住民らは、非浸水避難空間に避難することが困難と予想される。

このため、地域に立地する3階建以上の中高層建物に一時避難する「垂直避難」を検討する必要がある。

3階建以上の建物はあくまで避難候補建物であって、所有者・管理者等の同意がないと地域住民に一時避難先と位置づけるこ

図 津波浸水予想区域図(暫定)



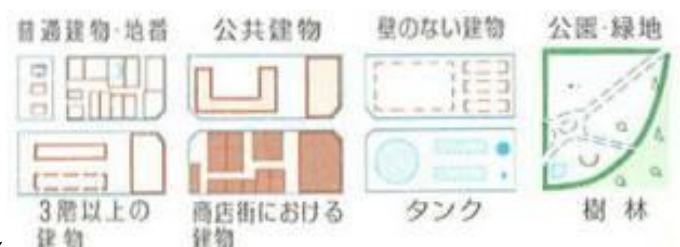
資料) 大阪市危機管理室

図 3階以上の建物分布図



作図) (株)ランドシステム研究所、岡本

図 1/10000 地形図凡例(一部)



資料) 国土地理院

とはできないが、地域協働による共助の取り組みとして、平野部の市街地における洪水時での有効な避難方法として考えられている。

なお、本調査での3階以上の建物の分布は、国土地理院、1/10000 地形図、2006年発行の「十三」「新大阪」「吹田」の一部より判読した。

(2) 避難距離

避難所への避難距離は、一般に、老人、子供の歩行等を考慮して、500mを標準と定められている。本地域の避難距離をみると、南西部のごく一部に、直線距離で500mを越える区域がみられる。

実際の道路分布を考慮すれば、500m圏はさらに狭い区域となることが考えられるが、概ねの目安から、遠距離避難区域を検討した。

(3) 防災上の課題(地域特性からみた)

これまでみてきた、防災に関わる地域特性から課題を整理した。

① 高齢化地区

高齢者の人口比率をもとに、特に高齢者比率の高いまちを取り上げた。

本地域では、小松5丁目、瑞光4丁目、大隅2丁目が相対的にやや高い地区である。

これらの地区においては、避難時に高齢者の避難を支援する取組みが不可欠である。

図 避難距離図



注) 円の半径は 500m

作図) (株) ランドシステム研究所、岡本

図 高齢化地区



作図) (株) ランドシステム研究所、岡本